

- 体育学研究, 12 (5), 190, (1968)
- 6) 高森秀蔵, 太田哲男, 松島宏, 田村道子: 泳げない生徒の指導に関する研究—心理的側面に対する—考察一, 日本体育学会第24回大会号, 307 (1973)
- 7) 東京都立大学身体適性学研究室編: 『日本人の体力標準値』, 第2版, 不堂出版, (1975)
- 8) 横山泰行, 橋本裕美子: 女子大学生の水泳遅滞者に関する事例的研究, 体育の科学, 29 (7) 489 ~ 494, (1979)
- 9) WHITING, H. T. A & STEMBRIDGE, D. E: Personality and the persistent non-swimmer, Res, Quart, 36 (3), 348 ~ 356, (1965)
- 10) WHITING, H. T. A 著, 杉原潤之輔, 坂田勇夫, 田崎常夫訳: 『かなづちの水泳指導—その科学的アプローチ—』, 泰流社, (1978)

表3及び図2は16PF人格検査による一次因子の各因子得点の群間の比較である。平均値の差の検定による結果からはいずれの因子においても両群に有意な差はみられなかった。そこで標準値と各群との関係を検討した。図中の星印(※印)で示されたように標準値と不合格群とにはQ₄因子(低緊張)に有意な差がみられただけであった。標準値と合格群とにはA因子(情緒的)、C因子(高自我)G因子(強超自我)、H因子(脅威に対する抗性)、N因子(狡猾)、Q₃因子(高統合)及びQ₄因子(低緊張)の7つの因子に有意な差があった。このことより合格群は順応的で、情緒的に安定し、義務感、責任感及び忍耐力が強く、抜け目なく、見通しがきき、自覚性や自制的な傾向がみられる。つまり、与えられた課題を素直に受けとめ、困難に敢然と立ち向かい、その課題達成に対して強い義務感をもって行動するという性格像を浮かべることができる。

全被験者に書かせた自由記述文による作文を検討した結果次のような記述がみられた。

不合格群の泳げない理由として「水の中で息が吐けない(sub 1)」、「呼吸はできるが苦しくて続かない(sub 4)」、「息つきがうまくいかない(sub 2, sub 7)」、「根性がない(sub 1)」、「50mという言葉がすごく長く感じ、泳げない気がしてしまう(sub 2)」、「いざ泳ぐとなると緊張してしまい、それだけで苦しくなってしまう(sub 1, sub 5)」などを挙げている。

合格群の記述には「息つきができたから(sub 9, sub 11, sub 15, sub 18)」, 「正しい手と足の動かし方を習ったから(sub 12, sub 13, sub 14)」, 「恐怖心が消えたから(sub 9)」, 「単位取得のため必死でがんばった(sub 9, sub 10, sub 11, sub 13, sub 18)」などがみられた。

このことから泳法や呼吸法などの技術面と心理面の双方に水泳の技能学習のポイントがある

ように思われる。水泳の技能学習においては、泳げない学習者のかかえる技術的問題を理解し、それに対応することと同時に、元々課題達成に対する積極的な性格の持ち主は、今回のように「単位取得のために」といった強い自我関与が生じたとき、技能学習を容易にするようであるので、この点からも学習者の心理的特性を把握し、学習意欲の喚起などの指導的配慮が重要であるように思われる。

5. 結 論

本研究の範囲内で次のような結論がみられた。

1) 泳げない者について

1. 細長型の体格で、上腕系の筋力、筋持久力が劣っていた。
2. Y-G性格検査による性格特性においてR尺度及びT尺度に有意差があった。つまりのんきで、楽感的な傾向を示した。
3. Y-G性格検査及び16PF人格検査による結果からは必ずしも情緒的に不安定、不適応、消極的な傾向はみられなかった。

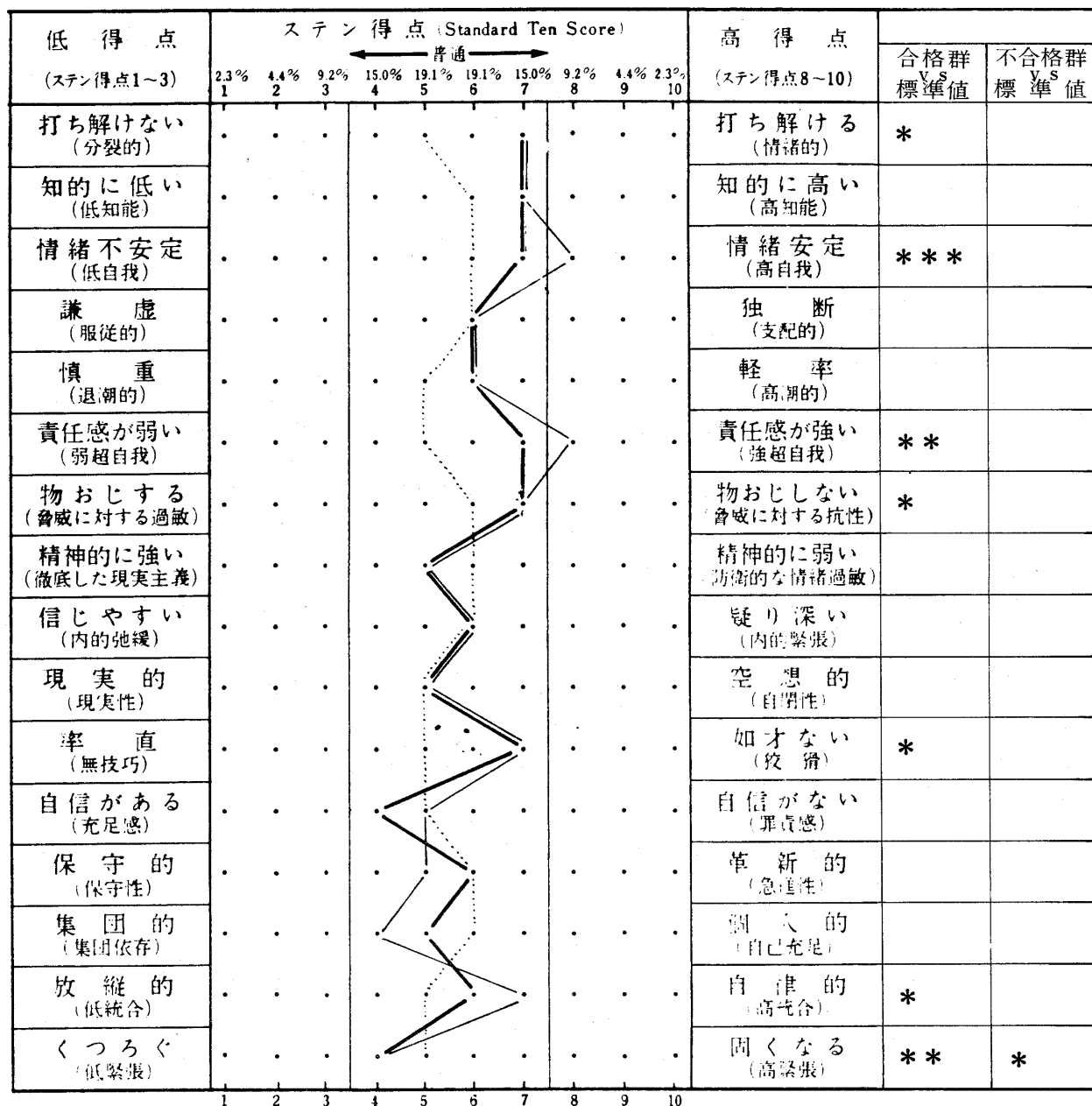
2) 泳げるようになった者について

1. 体格、運動能力において顕著な優位あるいは劣位はみられなかった。
2. 16PF人格検査において標準値をA, C, G, H, N, Q₃, Q₄の各因子に有意差があった。つまり、情緒的に安定し、責任感、義務感や忍耐力が強く、脅威に対する抗性も強く、如才なく、自制的で低緊張の傾向があった。

参 考 文 献

- 1) Cattell, R. B & Eber, H. W 原著：16PF人格検査手引，日本文化科学社(1982)
- 2) 松島宏，太田哲男，古賀浩二郎，田村道子：泳げない生徒についての心理学的研究，体育学研究，13(5)，97，(1969)
- 3) 村川俊彦，今村義正：水泳指導における一考察，日本体育学会第28回大会号，612，(1977)
- 4) 齊藤満：水泳学習と泳力との関係の分析－高校3年間の泳力追跡から－，体育の科学，29(7)，484～488，(1979)
- 5) 阪上光代，岸樽夫：水泳能力と基礎体力の関係，

図2 16 P F 人格検査プロフィールの比較



----- 標準値

————— 合格群

————— 不合格群

* P < 0.5

** P < 0-1

*** P < 0-01

困難を伴ったことを報告している。

³⁾ 村川らは、体育専攻女子学生の泳力とY-G性格検査によるパーソナリティ特性との関係を検討した結果、授業前、授業後においても不安定、不適応、消極性を含む性格類型は水泳の技能学習が困難な傾向を示し、安定、積極型及び平均型は水泳の技能習得が速く、泳力も高いことを報告している。

WHITING, H. T. AとSTEMBRIDGE, D. Eは、11才～12才の少年にMP I（モーズレーパーソナリティ検査）を実施し、泳げない生徒はより内向的で神経症傾向が高かったとしている。又、WHITING, H. T. Aは11才～15才の少年において内向的傾向と「かなづち」の間に高い相関があったことを報告している。

3. 研究方法

1. 被験者

本学の1年次生で昭和57年6月～7月の水泳

実技実習（週2回、3週間、計6時間の正課授業）において全く泳げない者（クロール及び平泳ぎいずれも10m以内の泳力の者）の中から最終日の試験（合格基準各50m完泳）に合格した者（N=10）と数回に及ぶ追試にもかかわらず未だに（昭和58年11月現在）不合格の者（N=8）計18名。

2. 測 度

1) 身体項目：身長、体重、ローレル指数、文部省のスポーツテストの運動能力テスト（50m走、走り幅とび、ハンドボール投げ、斜懸垂腕屈伸、1000m持久走）

2) 心理検査：Y-G性格検査（矢田部・ギルフォード性格検査）、16PF人格検査のA型式

3) 作文：自由記述文により「泳げない理由」、「泳げるようになった理由」、「水泳の過去経験」などを書かせた。

4. 結果と考察

1) 体格・運動能力について

表1. 体格・運動能力の群間の比較

群		身長	体重	R. I	50m走	走り幅とび	ボール投げ	斜懸垂	持久走
合格群	×	157.4	52.9	136.1	8.64	321.0	14.8	25.3	289.4
(N=10)	S. D	4.2	3.5	13.7	0.57	25.9	1.8	6.6	16.8
不合格群	×	157.3	49.9	127.8	8.59	324.8	14.1	22.0	289.9
(N=8)	S. D	3.8	5.8	9.7	0.42	32.2	1.2	3.3	11.9
t		0.0523	1.3606	1.4444	-0.2068	-0.2779	0.9423	1.2860	0.0710

all non significant

表1は、両群の体格と運動能力の平均値、標準偏差値及び平均値の差の検定による比較であるが、全項目において有意な差はみられなかった。しかもいずれが優勢、劣勢という傾向も顕著ではなかった。

そこで『日本人の体力標準値』より同年代の女子の標準値を求め、それぞれの群との差の検

定を行った結果、ローレル指数（R. I）において不合格群と5%水準で有意な差がみられ不合格群の方が細長型であった。つまり不合格群は冷耐性が低いため水泳技能学習に不利だと思われるスリム型の体型をしていた。また、不合格群のハンドボール投げと斜懸垂腕屈伸が0.1%水準で有意な劣勢を示した。つまり、上腕の

女子短大生における水泳の技能学習成績と 身体的・心理的特徴について

藤 田 明 男

On the physical and psychological characteristics
to learning ability of swimming skill in female students.

by Akio Fujita

1. 目 的

本研究は、水泳実技履修を必修とされている
本学初等教育科女子短大生の水泳の技能学習成
績と身体的・心理的特徴との関係を検討すると
ともに今後の水泳指導への資料を得ようとする
ものである。

2. 文 献 考 証

1) 水泳の技能学習と身体的要因

⁵⁾ 阪上らは小学生男女(4~6年)を被験者と
し、泳力によって上位、下位各々25%の2群を
抽出し、基礎的体力(運動能力、筋力、筋協応
性、柔軟性)についての群間の差異について比
較検討している。その結果、運動能力において
は泳力の上位群と下位群との間に走り幅とび、
ボール投げ、懸垂に有意な差のあることを報告
している。又、体力測定項目では、手と足の動
作を正確に、速くそしてリズムカルに働かせる
必要からくる筋協応性及び柔軟性に有意な差を
見い出している。しかし、水泳能力の劣位者は
ある特定の能力が劣っているのではなく、一般
運動能力や基礎的体力が全般的に劣っている傾
向があると結論づけている。

⁸⁾ 横山らは、女子大生の水泳遅滞者4名を事例
的に研究し、体力面において14項目中7項目
(身長、上腕囲、握力、背筋力、サイドステッ
プ、閉眼片足立ち、立位体前屈)が全被験者に
共通して標準値よりも劣っていたことを報告し
ている。

⁴⁾ 斎藤は、男子高校生の3年間の追跡研究から、
泳力と体格及び運動能力との関係を検討したが、
全体的にみて体格や運動能力との関連がみられ
ず、個体間の泳力差は泳法技術の巧拙によるも
のとしている。

2) 水泳の技能学習と心理的要因

²⁾ 松島らは、女子の中学生と高校生を対象とし
て、泳力と水泳に対する好・嫌態度及びT P I
(東大式パーソナリティ検査)による性格特性
について検討し「技術指導以外にパーソナリテ
ィの諸特性が水泳の技能学習の際に大きな影響
を及ぼしている傾向がある」と結論している。

⁶⁾ 高森らは、女子高校生を対象として泳力をY
ーG性格検査(矢田部・ギルフォード性格検査)
とMAS(顕在性不安尺度)によるパーソナリ
ティ特性との関係を検討した。その結果25m以
上泳げる群のYーG性格検査の平均プロフィール
はA型で、泳げない群はAB型に属していた
ことを報告している。又、両群のYーG性格検
査の各尺度の比較においてI、Ag及A尺度に
有意な差を見い出している。さらに水泳授業の
最終試験において合格した群の平均プロフィー
ルはA型、不合格群の平均プロフィールはA'
型であった。各尺度間においてはC、I、Ag
及びR尺度に有意な差を見い出している。一方、
MASによる不安傾向には顕著な差がみられな
かったことを報告している。

⁸⁾ 横山らは、前出の女子大生4名にYーG性格
検査を実施し、情緒不安定、不適応、消極型で
あるE型を示した被験者が最も水泳技能学習に